
闇人 アント

三一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇人 アント

【Nコード】

N3753T

【作者名】

三一

【あらすじ】

「彼女」が目覚めたのは暗い箱の中だった。白狼に導かれ、彼女は過酷な運命に巻き込まれていく。

プロローグ 目覚め

人は暗闇の中に光を見つけると、それを「希望」と呼ぶ。それに
すがり、いずれは奪い合い、また「戦争」という名の暗闇を呼ぶ。
それを繰り返してきた。なぜそれを盲目的に繰り返すのか。それが
人の歴史であり、営みの一つであるからだ。そうして人は進化し、
生き残るに相応しい力を得てきた。

それが真理だというのなら、我々は歴史の分岐点となる。新たな
人類の歴史の幕開けである。それが、天から注ぎし大いなる神の御
心。

そして、神から生れし子供たちの歴史が始まる。

光が目覚めたその時から、混沌は秩序へと生まれ変わる。

さあ、運命の選択をしよう。

私は長い夢を見ていた。やけに現実味のある夢だった。黒い人影
が私を囲んでいて、私の身体には自由がない。目覚めているのに眠
っているような感覚を引きずって、広い部屋で誰かを追いかけた。
まるで、自分が野獣にでもなったような。ああ、思い出したくない、
悪い夢。

そんな悪夢に嫌気が差して、意識が現実に戻った。いい目覚めで
はない。目を開けると私はとても狭い所にいた。真っ暗で何も見え
ない。横になって、まるで棺桶に入れられているみたいだ。私は確
か自分の部屋のベッドで寝ていたんじゃないかな。おかしいな。
もしかして私は誘拐されて監禁されているんだろうか？いつ？誰
に？いや、そんなこと考えてる場合ではない。こんな狭いところ、
いるだけで気がおかしくなりそう。身の危険もあるし。とにかく、

ここから出なければ。そう思い、目の前の壁に触れた。

「わっ」

ガガガ…という音とともに急に辺りが眩しくなつて思わず目をつぶった。しばらくして、砂っぽい風が肌を撫でていくのがわかった。目を開けると目の前には青い空と雲が広がっている。明るみに慣れない目にチカチカと星が踊った。明るさに目も慣れてから起き上がると、周りには乾いた地面が広がっている。自身のセミロングの黒髪が風になびいては顔を打つ。

立ち上がり、その棺桶から出るとそこはまるで学校のグラウンドのようだった。山奥の分校のようで、山と木々が外側にある。肝心の校舎らしきものは廃校なのかボロボロだった。自分が出てきた棺桶はどうやら鉄…というか機械でできた「箱」と言った方がよさそうだ。誰がこんな校庭のど真ん中にこんなものを置いたんだろう。誘拐にしては様子がおかしい。

横には「箱」の蓋が転がっていて、その中には茶色のシヨルダ―バックが一つ置いてある。自身のものはわからないが、とりあえずそれを肩にかけてから再び周りを見渡した。

「ここは…どこだろう」

彼女は辺りをキョロキョロ見回しているうちに、あることに気がついた。黒いブーツ、黒いジャケット、黒いワンピース。全部見覚えのないものを着ている。

「私…こんな服持ってたっけ…？」

夢をまだ見ているんだろうか。不気味さを感じていると、校舎の裏の方から人の声が聞こえてきた。人はいるようだ。よかった。こ

ここがどこだかやっとなる。自分がどうしてここにいるのかもわかるかもしれない。とにかく不安から早く解放されたかった。

「んだよ、やっとなれたと思ったら入ってたの人じゃねーか！」

「誰だよ『金目のものだ』とか言っただけは」

「いいじゃねえか。その代わりに若い女が入ってたぜ」

柄の悪そうな男が10人弱。風貌は不良と山賊を足して二で割ったような……とにかく良い人には見えない。そうこう考えているうちに、彼らはあつという間に彼女を取り囲んでしまった。さすがに助けてもらえる状況じゃないことくらいはわかった。誘拐犯はこの男たちなのだろうか。

「さっそく中に連れてこうぜ」

「面倒だ、ここでやっちなおう」

訳のわからないまま、絶対絶命のピンチである。走って逃げようにも、無理な話だ。恐さのせいかわ女は立ちつくしていた。が、なんとか口は開いた。

「あの……」

「あん？なんだ、ねえちゃん。ここはなあ、紅蓮系荒賊『ザム』のアジト……」

「ぎゃああー！」

「なんだ、うるせえな！」

奥の一人が突然悲鳴を上げた。その場の全員が振り向くと、白くて大きな犬、というか人よりも1.5倍はありそうな狼が人を押し倒し、今にも頭に食らい付く勢いだった。

「お、狼だ！」

「また出やがったぞ！！」

周りの男たちが慌てて銃を向ける。

彼女は「どうしてこんなわけのわからない状況に巻き込まれているんだろう」と茫然としていた。悪党に人喰い狼：まるでマンガみたいじゃないか。おまけにごく自然に銃まで出てきた。こんな物騒な世界に住んでいた覚えはないのだけれど。

「この…化け物！」

一人が持っていた散弾銃を引き金を引く前に、白狼は大きく飛び上がった。男たちは偉そうにしていた割には統率もまるでなく、慌てている。いよいよ夢なんだと彼女は思った。

そして、その狼は彼女の前に降り立つ。狼の眼差しに、不思議と狂気は感じなかった。

「…」

「え」

気がつくと彼女は狼の頭で身体を投げ上げられ、そのまま背中に乗ってしまった。

「わあっ！ちよ…」

他の男が銃を構える前に狼は校舎の裏側にある山に向かってあつという間に走り去った。倒され、泡を吹いて気絶している一人を除いて、男たちは立ち尽くしていた。

「あのクソ狼…また出やがった…！」

「しかもせつかくの女まで持ってかれちまった…」

「なんだあ？騒がしいな…オイ」

廃校舎からスキンヘッドの大柄の男が煙草をくわえながら出てきた。背中には大きなマシンガンを背負っていて、”いかにも”この賊たちの親玉という感じた。

「ボス！！またあの狼が現れまし」

言い終わる前に、彼は銃を部下の頭に向けた。「ヒイツ」と小さな悲鳴が上がる。煙草を落として踏みつけながら火を消し、ジロツと部下に目を向ける。

「見りやわかる。今日こそ仕留めようじゃねえか。早く追えよ？…それとも先にこの弾で頭冷やすか？」

「お、お、追いかけます！」

他の部下も慌てて裏山に走り始めた。ボスは放置された「箱」に目を向け、銃を撃った。が、弾はそれに傷一つ付けられず、金属音

だけを立ててあちこちに跳ね返って散乱した。「箱」の電源もまだ入っているらしいが、操作できそうなものもない。近くに転がる蓋を腹いせのように蹴り飛ばした。

「何に使うのかねえ…狼野郎サンよ」

彼女は振り落とされないように白い毛に必死に掴まった。不思議なもので、その狼は山の中を彼女を気遣うように走った。枝にも当たらないし、振り落とさないよう足運びは滑らかだ。やはり、この白狼はただの獣ではないように思える。

山の中腹にある小屋まで来ると狼は止まった。小屋は洗濯物が干されていたり、生活味が漂っている。誰か住んでいるんだろうか。この狼の飼い主だろうか。

次の瞬間、狼は座ってしまい、その背中を滑り台のように滑って地面に思いつきり尻餅をついた。

「あいたっ」

訳のわからないまま狼に拐われてしまったが、とって喰われる気はしない。振り返ると狼はじつと彼女を見ている。よく見るとシベリアンハスキーみたいで可愛いと思い、撫でようと近づいてみた。

「撫でるなよ。俺は犬じゃないんだ」

「喋った!!」

アニメや漫画で大きな犬が喋る描写があるが、まさか生で拝めた

ことに彼女は怖がるどころか感動していた。

「…変な奴」

そう言つと狼の毛はするすると短くなり、図体も縮んでいく。

「…！」

白い毛が完全になくなる前に小屋の前に干してあるトランクスを履いた。そこにはパンツ一丁の白髪青年が一人。

「人になつ…！いや、服着てください服！」

「いちいち煩い。言われなくてもそうする」

一緒に干してあつた白いシャツと黒いスラックスを履く彼に、彼女は尋ねた。

「あの…ここは…」

「俺の家」

「いや、そうじゃなくて…」

「俺はヨキ。お前は？」

まったく彼女のペースに合わせる気がないのか、他の洗濯物もたたみながら見向きもせず会話を進めていく。

「あ…私は…キリヤ…ヒカリ」

「…キリヤ ヒカリ。間違いないな」

「え」

「何から説明すればいいかわからないから、事実から言っぞ。あんたが今いるここは、あんたが眠りについてから10年後。星歴1102年のアギユヴェリアだ」

ブログ 目覚め (後書き)

初連載モノです。気長に書くつもりなので、気長に読んでもらえたら嬉しいです^^

10年の月日とカヴァリエーレの青年

”アギユヴェリア”それはヨキやヒカリが今いる国の名だ。4つの大陸に囲まれた、島国である。緑もあれば、都会には高層ビルが立ち並ぶ。世界には多くの国が存在しており、ほとんどが貿易や協定で繋がっている。少なくとも、空想の中の狼青年や山賊まがいの悪党がいきなり登場する世界ではない。ヒカリの記憶によれば。

「10年って…」

「あんたはさっきの箱から目覚めたる？あの中で10年、歳を取ることもなく眠ってたんだよ」

さも当然のように彼は洗濯物をかごに入れながら言った。人間の状態でも高い背の彼は軽々と高いところに手を伸ばしていく。そして、混乱しているヒカリに親切な説明をする気はないらしい。

「ちょ、ちよつと待って！何で私が10年も眠ってなきゃならないの！？それに家族や友達は！！？」

ヒカリは戸惑うあまり声を荒げた。まるでSFのような話を初対面の相手から告げられ、信じることもできずに気が動転していた。

ヨキはそんな彼女をため息を一つついてから、面倒臭そうに手を差しのべた。

「そんな地べたに座って話すのもアレだろ。小屋入れ。茶くらいは出す」

「…」

助けられたとはいえ知らない男の家には入りたくなかった。ましてや人間なのかもわからない、得体の知れないやつ。目つきも悪いし。

「勝手にしろ」

ヨキはそう言う小屋に入ってしまった。

ここでいいなんて言ったものの、地べたに座るのはやっぱり嫌だったので、ワンピースの砂を払って近くに倒れている木に腰掛けた。

「…なんなの、もう…わけわかんない」

ヒカリはイライラを鎮めるため、目覚める前のことを思い出してみた。

私は21歳の夏を謳歌していた、普通の大学生。バイトして、友達と遊んで…。あれ？いつから記憶が途切れたんだろう。長い夏休みの、どこから途切れている？

「おい」

「！」

小屋から出てきたヨキが持っていたのはコップ二つと水の入った丸い水筒だった。二つのコップに水を注ぎ、一方を差し出す。

「ずっと眠ったままだったんだ、体に入れておけ」

「あ…ありがとう」

自分より少し年上に見えるが、ずいぶんと上から目線な親切だ。彼は加えて「毒なんて入ってないからな」と自身ももう一方のコップに口をつけた。

一口飲むと食道をひんやりとした感覚が撫でるように落ちていく。同時に、炭酸を一気に飲んだ後のように胸が苦しくなった。

「…うっ」

「少しずつ飲まないといわせるぞ。10年使ってなかったんだからな。確かに少しむせただけで、次第に普通に飲めるようになってきた。10年、眠っていた…やはり本当なのだろうか。コップの水にいつもの自分の顔が映る。いつも見ている自分なのに。10年なんて私は三十路じゃないか。」

「あの保存装置の不完全なところだ。知らずに食べ物でも入れるとみんな戻すらしい」

「…あなたは何者なの？何で私の事、知ってるの？」

さつきより落ち着いた彼女を見て、ヨキも小屋の壁に寄りかかりながらもう一度水を飲んだ。木漏れ日が彼のシルバーのピアスをキラキラと照らした。

「俺はプロトタイプの暗人^{アント}をサポートするカヴァリエーレだ」

「プロトタイプ？アント…？」

「…とりあえず、暗人から説明した方がよさそうだな」

そう言つとヨキは近くの切り株にコップを置いた。

「簡潔に言つと『暗人』っていうのは超能力者や超人つてとこだ。俺も狼に変身できる暗人だ。超能力者って言つても、人工的に作られたもので、あんたは10年前のその試験体。そういうと人造人間とも言えなないか…」

「あ、はは…超能力…ね…」

いきなりの話の飛びようにヒカリは頭が追いつかない。ヨキは顔色一つ変えずに話を続けた。

「10年前、違法に人体実験を行つた科学者集団がいた。あんたは不運にもその研究対象に見事『選ばれてしまった』らしい。何をもつて選んでいたかは知らないが、いつから記憶が途切れたか、正確には思い出せてないんじゃないか？」

ヒカリはあの夏の思い出は確かに覚えているが、詳細な日付などはまるで記憶にもやがかったように思い出せなかった。朝起きたのかも、夜寝たのかも、いつこんなことに巻き込まれたのかも何も

「9年前、この世界は戦火に包まれた。南大陸の大国ダグルと北大陸の大国ゼルティが同時に相手国を攻撃したのをきっかけに、『文明大戦』やら『新人類大戦』なんて呼ばれてる大戦があつたんだ。ひどいもので、世界のほとんどが無法地帯になった。勝利者なんてのもいなかった。あらゆる国が敗者になった。今や世界は混乱と生存競争の渦中にある。この国も地域ごとに自治が行われているが、さつきみたいな賊…『荒賊』もほつたらかしだ」

「…大戦…戦争…？何よ、それ…」

「…そのままの意味。あんたが起きていた時代でも南北の大陸は折り合いが悪かっただろ？火種は色々あったみたいだが…」

ヒカリは信じられなかった。信じたくなかった。信じたらあの日々はもうないのだから。戦争なんて信じたら、大好きな人々の存在が消えてしまっているかもしれないのだから。なにより、そんな現実味のないことを次々と言われても。

「暗人はその科学者集団がその戦争に備えるためか、戦争で使用する気だったのかは知らないが、とにかくその大戦絡みで作られたそうだ。その初期段階で作られた試験体は不完全な所が多く、10年の冬眠を経て目覚めるよう保存されたわけだ。俺はその試験体を補助、ナビゲートする役目を与えられたカヴァリエーレ。つまり、あんたの護衛ってとこだな」

「…そんな話…」

「まあいきなり信じろって方が無理か」

確かに信じられないが、このヨキという青年が目の前で狼から変身したのも事実。夢なら覚めて欲しい、何回もそう思った。でも、夢にしてはひどくリアルで、眩暈がしそうだ。

同時に頭が追いつかないあまりに逆に冷静になっている自分もいた。この青年が言っていること、確める方法を彼女は一つしか思い浮かべられなかった。

「あの、私…」

ヒカリが言葉を放った瞬間、ターンと渴いた音が耳をついた。まるで、銃声のような音が彼女の声を裂いていった。

10年の月日とカヴァリエーレの青年（後書き）

説明がだらだらと…読みにくいところがあつたかもしれません。
次話からは色々動いていくつもりです。

赤い運命のボタン

「やったか!？」

金髪のツンツン頭の男が興奮しながら言った。手には猟銃が握られている。傍にいたボスが手を挙げると後ろから男たちがゾロゾロと銃やバットなどを持ちながら茂みからのり出し、少し離れたところにみえる小屋に向かった。

「…ダメだな。当たっちゃいるようだが、逃げられてます」

致死量を思わせない血痕と、倒れたコップの水が散乱しているだけ。ボスが静かに「小屋に火をつける」と言った。部下は笑いながら持っていた酒を小屋にかけ、マッチで点火する。みるみる木製の小屋は火の勢いを増し、朽ちていく。

「あの狼野郎…毎度俺達の邪魔しやがって…いい気味だぜ」

「お前ら、戻るぞ」

「え? あいつら探さなくていいんですか?」

リーダーの男はニヤリと笑った。

「あいつらなら、俺達のアジトに向かうはずだ」

「ヨ、ヨキさん…」

ヒカリは恐る恐る名前を呼んだ。また、山を駆ける白狼の背中に掴まりながら。

「なんだ」

「血が…」

ヨキの足からは血がぼたぼたと流れている。木の枝や小石がぶつかるたびに眉間に皺がよった。

銃声が響いた瞬間、ヨキはヒカリをかばい、右腕に銃弾をかすめた。そして、息もつかぬ速さで彼女をあの場合から連れ出したのだった。

「大したことはない。かすめただけだ。それより、あいつらが戻る前に『箱』に向かう」

「え、なんでわざわざ…」

「あの『箱』にはあんたの能力のロックを外す安全装置があるんだ。あんたがアンロックしてたら、あの『箱』は自動的に解体してるはず。本当は夜にでも行こうと思ってたんだが…こうなったらこのまま行く」

ヨキは高い崖も軽々とジャンプし、山をどんどん下りていく。一方ヒカリはジャンプの度に「ひっ」と怯えながら、親にしがみつき子猿のように彼にしがみついていた。

そしてあつという間に先ほどの廃校に辿り着いた。人気はない。

どうやらまだ賊たちは戻ってきていないようだ。

「まったく…あんな校庭のど真ん中に置きやがって…早く済ますぞ」

「う、うん」

校庭の真ん中に置かれた「箱」にヨキは素早く近づき、ヒカリを降ろした。

「俺は見張ってる。中に赤いボタンがあるはずだ、早く探して押せ」

「えっと…赤いボタン、赤いボタン…」

彼女は中に入ってボタンを探した。なんだか、いろんなネジやらランプやらがあって探しづらい。ヨキは周りを伺いながら「まだかとヒカリを急かす。

「ちょっと待ってよ、見つけづらいんだか」

ターンッ！

「！」

銃声上がり、ヒカリの横の地面を銃弾がえぐる。サーッと彼女の血の気が引いた。ヨキが唸り声を上げて狙撃先を探すと、屋上から猟銃を持った男がこちらを狙っていた。

「おい、当てるんじゃないぞ」

タバコや酒でかすれたような低い声が聞こえた。先ほどのボスと

部下たちが銃を構えながら、校舎の裏側からゾロゾロと姿を現した。

「やっぱりなあ。あの箱、分解して金属売ろうにも壊せねえし、まだ電源も入ったまま…いじくっても反応しねえ。何かしら用があったらまた戻ってくると思ってたぜ」

ヨキが鋭利な牙を見せながら男たちを睨みつける。そして、小声で「早くしろ」とヒカリに言った。

「おっと、変な気起こすなよ。いくら狼さんでも、娘さん連れて、その脚でこの銃の数からは逃げ切れねえだろ？」

「…」

「お前には散々俺達の邪魔してもらったからなあ…近くの村襲うのも、女さらうのも…正義の味方気取りかよ、この化け物が」

ヨキとボスが睨みつけ合う中、ヒカリには冷や汗が流れていた。

「（……………ない）」

赤いボタンがどこにもない。確かに箱の中にあると言っていたはずだ。でもない。目の前では緊迫した空気が張りつめている。こんな状況下で「ありませんでした」なんてとても言えない。というか、なかったら命が危ない。

「そうだなあ…確か俺達がそれ…手に入れた時からだったなあ…お前が現れたのも」

「お前等がこの『箱』に手を出したのが悪い」

強気なヨキの言葉に賊たちはいきり立って「もう撃っちゃおう」「なぶり殺してやる」と口々に叫んだ。

一方でボタンが見つからないヒカリは、賊を逆なでさせるヨキにやめてくれと心の中で懸命に叫びながらボタンを探し続けていた。

「廃墟から出たモンは手に入れた者勝ちだろ…？ 荒賊ナメちゃあならねえな」

ボスがショットガンを構えた。ヨキはヒカリを庇いながら「まだか」とさつきよりも力を込めた声で尋ねる。

「…ヨキさん」

「何だ」

「おい、なにコソコソ話してるんだあ！？ 蜂の巣になりてえのか！」

賊たちは早く攻撃を始めたくてウズウズしている。ヨキもさすがにヒカリの身の安全が気にかかる。

「あの…ボタン…ない」

「…は？」

今まで賊から離さなかった目線がヒカリに向いた。

「だから、ないんだってば」

「バカ言っな。必ずあるだろ」

「ないものはないって言ってるじゃない！」

「見落としてるんじゃないのか？目悪いのかあんた」

「はあ！？」

終いには言い争いが始まってしまった。完全に茅の外の賊たち。しびれを切らしたのかボスが空に向かって銃を打つ。その音に二人は思い出したかのように向き直った。

「ふざけるのもいい加減にしろよ…？その箱…金になると思ったんだが…お前らも扱いがわからねえとは」

「…」

「ならお前らに用はねえ。とっとと殺しちまおう。なあに、死体はちゃんとジョーの野郎に見せしめにしてやるからよ」

ヨキはここで戦う覚悟を決めたのか、足に力を込めた。ポタポタと血の滴が流れる。賊たちは待ってましたと言わんばかりに武器を構え始める。

「…こいつには指一本触れさせない」

「ハッ。なんだよナイト気取りか？カッコつけてんじゃねえよ！」

銃口がヨキに向いた。

「俺は…そういう運命だ」

まるで厭世的な、嘲笑うような言い方だった。怖い目とは裏腹な、悲しそうな背中。そんなヨキの背中見ていたヒカリの視界に『箱』の蓋が入った。調べていないのはあれしかない。外側の部分が上になっている。もし、あれの内側にあるのだとしたら。

「じゃあ、運命とやらを恨めよ。惨めな狼さんよお!!」

このままじゃ、ヨキが死んでしまう。初めて今日会った私のせいで。なんで私を守る役目になってしまったのかはわからない。だってそれも聞けないほどに、短い時間しか経っていない。でも、この人は私の為に今まで身をていしてくれた。悪い人ではない。ここで死なせちゃ、だめだ。

引き金に手がかかった瞬間、ヒカリは走り出した。撃たれるなら、最後まで希望を捨てずに撃たれた方がマシだった。それは、本能に近い衝動だった。

突然動いた標的に、賊たちの銃口はヒカリに向かう。ヨキは反射的に彼女を庇おうとしたが、脚に痛みが走り、彼女に追いつけない。

「！ ヒカリ！」

彼女が蓋をひっくり返した瞬間、何発もの銃声が轟いた。

旅立ち

銃声の雨のあと、砂ぼこりが舞った。ヨキは驚きと、困惑の眼差しでそこを見つめた。

「…ヒカ…」

名前を呼ぼうとした時、ヨキの後ろからガシャンと金属が崩れる音がした。振り返ると『箱』がただの鉄屑になっている。

「な、何だあれ…！」

賊の一人が砂ぼこりを指差しながら声を震わせる。まるで恐ろしいものでも見るような目をしながら。

砂ぼこりが晴れると、不気味な黒い壁がヒカリを覆うようにそびえ、銃弾を全て受け止めている。そして銃弾は跳ね返る訳でも、反動で潰れる訳でもなく静かに地面に落ちた。すると、黒い壁がフツと消える。

そこには目を丸くして、腰を抜かしているヒカリがいた。怪我一つない彼女にヨキは安堵のため息をついた。

「…なるほど…その女も化け物ってわけか…お前ら、構わず撃て！」

ヨキはヒカリに駆け寄り、背中に載せた。

「さっきのがあんたの力か？」

「…へ？」

まるで他人事のようなヒカリ。どうやら無意識でやったらしい。ヨキはヒカリに「あの壁、俺ごと張れ」と静かに言った。

「え、ちょ…そんな張れって言われてもやり方が…」

「大丈夫だ。特別なことじゃない。あんたは歩くのを意識したりしないだろ。それと同じだ。いいから早くやれ」

最後の一言にカチンと来つつも、ヒカリが前に手をかざすと黒い壁がまた現れた。銃弾は同じように壁に阻まれ、落ちていく。

ヒカリは不思議な感覚を味わっていた。

初めてすることなのに、自然にそれができる。ヨキが言った通り、壁の作り方をそう意識しなくても出来てしまふ。なんだか少しだけ恐ろしいとも感じた。

壁は外から見ると真っ黒だが、内側からは黒く薄い膜を張ったように比較的ハッキリと周りが見える。

「走るぞ」

そう言つとヨキは賊にむかつて走り出した。黒い壁を纏つて突進してくる二人に、賊たちは情けない声をあげて散り散りに逃げ惑った。

「ヒイイイ！」

「あ、馬鹿野郎！逃げるなああ！」

ボスは絶えずマシンガンを撃つが黒壁の前では全て無駄弾に化してしまう。弾も切れ、前を見ると得体の知れない壁が猛スピードで迫ってきた。

「う、うわあああ!!」

頭を抱えてうずくまる彼の頭上をヨキは軽々と飛び上がった。そのまま賊たちをかわし、ヨキとヒカリは廃校の周りの林の中へと消えた。

啞然としながら立ち尽くす賊たちは恐る恐る、うずくまるボスに近づいた。

「だ、大丈夫ですかボス…」

「…」

「…ボス？」

スキンヘッドの強面なボスは白目を向いて情けなくも、気絶していた。

「ここまで来れば追って来ないだろ」

ヨキはある程度人が通れるくらいに舗装された道に出た。倒木や土砂で荒れてはいるが、おそらくかつては車も通っていたようだ。ぐにゃっと曲がり、一部だけ残したミラーに二人が写っている。

「私、もう一人で歩けるよ」

ヒカリは背中から降りると、まじまじと自分の手を見た。さっきの黒い壁を自分の意思で操れると思うと、なんだか気持ち悪い気もした。

「ずいぶんと特殊な力だな」

「……そう…なのかな」

他の力なんてヨキしか見ていないのでなんとも言えないのだが。なんとなく、ヒカリは近くにあった木に向かって手をかざした。黒壁が現れると、かざした手を握って、何かを離すように手を開いた。

バキィイツ！

「！」

「わ…」

一瞬にして木が数本吹き飛ぶ。驚いたヒカリは思わず手をひっこめた。

「今のは何だ…？」

もう一度同じ事をしてみるが、何も起こらない。

「おそらくだが…衝撃を防ぐと同時に受けた衝撃を放出できるのか」
不思議そうに手を開いたり握ったりして、ヒカリはきょとんとしている。

「…まだまだ操作には不安がありそうだ」

ヒカリは、どこかでこの力を使った気がしてならなかった。こんな風に手をかざして操っていた。この力を、誰かに向けて。誰に向けた？誰かに…攻撃を…。

「おい」

「！ 何？」

「どうするんだって聞いてるんだ、これから」

「あなたは…家…さっきの小屋に帰らないの？」

「あんなのは家じゃない。あんたを監視する為の仮住まいだ。俺に家なんてない。俺はあんたのカヴァリエーレだ。あんたに付いて行く」

困ったようにヒカリは頭をかいた。付いて来てくれるのは安心なのだが、こんなに大きい狼一匹はたいそう目立つだろうし、全部委ねられてしまったし。

「…とりあえず、近くに町みたいところないかな？そこに行つてから色々考えたい」

更に加えて「あなたの怪我も診てもらわなきゃ」と、傷を指差した。

ヨキは何も言わずにため息をつく、ヒカリが持っていたシヨルダーバックを鼻でこづいて「開けてみる」と言った。そういえばすっかり中を見るのを忘れていた。開けると、携帯電話のような手の

ひらサイズの液晶の機器が最初に出てくる。

「ケータイ？」

「あいにく電波塔もまちまちにしか整備されていないから、ほとんど電話は使えない。画面に触れてみる」

指を画面に当てると、地図が立体映像で浮き上がった。東西南北の4つの大陸と、そのほぼ真ん中に位置する小国アギウエリア。ヒカリがびっくりしていると、ヨキが「グザニア」とつぶやいた。地図がアギウエリアの北部、グザニアにズームアップされた。一つの赤い点が点滅し、その近くには青い点が大小バラバラに映っている。

「ここ、グザニアなの！？」

ヨキは「言ってなかったか？」と言いながら、説明を続けた。

「赤い点は俺達のいるところだ。青い点は町・自治区。とりあえず、人もいるし物資もある。一番近いのは、この大きい点の『自治区七の空』だな。夕暮れには着くだろう」

そう言うとヨキは再び歩き出した。ヒカリもバックを閉めて付いて行こうとした時、バックの中が見えた。水や軽食、ハンカチ。ヨキの応急処置にいいものがあつたとハンカチを取り出すと、その奥に一丁の拳銃があつた。何も言わず目を見開いて、歩みを止める。

「どうした、行くぞ」

「ヨキさん……私は……これから戦うの？」

ヨキが振り返るとヒカリが真っ直ぐ彼を見ていた。悲痛と不安が混じる眼差しを、冷たい視線で返しながら口を開いた。

「そういうこともあるだろうな」

「…」

自分がさっきみたいな力を人に使ったらどうなるんだろう。人がさっきの木みたいにぐしゃぐしゃになるのかと思うと恐かった。

「それが嫌だっていうなら死ぬかもな」

彼女は眉間に皺をよせて下唇を噛んだ。人が死ぬのは嫌だし、自分が死ぬのなんてもっと嫌だ。

「…幸運にもあんたの力は身を守る力だ。俺が戦うし、あんたは死なない。心配するな」

そう言っただけヨキは前を向きなおした。

「あの！」

ヒカリはショルダーバックの紐を握りしめながら叫んだ。

「これから、よろしくお願いします！！」

そして小さく「ヨキさん」と付け足した。ヨキは振り返りはしなかったが、少しだけ笑っていたような気がした。

「…その”さん”はやめてくれ。ヨキでいい」

「…ヨキ。じゃあ、私にも”あんた”って言わないでね」

「…わかったよ。早く来い、ヒカリ」

ヒカリは小走りでヨキの隣に並んだ。「手当してあげる」とヨキの脚にハンカチを巻いて、ヒカリは笑った。不安を忘れるかのよう

に。
不安でならない。何も知らないことばかりだということも。ただ、この大きな白狼はどうやら私を助けてくれるらしい。考えなければならぬことが沢山ある。それを考えるのは、この世界を見ながら考えることにしよう。

だって、まだ私は一人ではないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3753t/>

闇人 アント

2011年10月9日02時45分発行